

応募作品の審査結果

	(単位:点)					
部門 <div>作品数</div>	絵画	彫刻	書	工芸	写真	計
応募数	174	12	35	19	64	304
入賞入選数	125	8	21	10	29	193

運営委員長	内田いず美 （浜松市美術館協議会会長）
審査員	
絵画	占部 史人 （静岡大学教育学部 美術教育専修講師） 内田あぐり （日本画家）
彫刻	御宿 至 （彫刻家）
書	広瀬 舟雲 （武蔵野大学教育学部教授）
工芸	山本 一樹 （工芸作家、静岡文化芸術大学名誉教授）
写真	若木 信吾 （写真家）

審査員は、公募展の審査員経験者や、美術関係者、市民らから選出された。

審査員は、公募展の審査員経験者や、美術関係者、市民らから選出された。

今回の出品作品も力作ばかりで、鑑賞すればする程それぞれの作品の良いところに引き込まれるような作品がとでも多かったのが印象的でした。大賞に選ばせて頂いた「街角のカフェ」はとでも温かいタッチで人物や車などのモチーフが描かれているのが印象的で、ずっと観ていたくなるような素敵な絵画作品です。構図も工夫されていて、カフェの扉やテントに描かれているモノリザにも絵画的な面白さを感じました。

また、高校生くらいの若い世代の作品が多かったのも印象に残りました。特別賞に選ばせていただいた「まんぶく電車」からはブッダやキリストとオムライスなどの奇抜なモチーフ選びに若い世代の感性を感じました。入選作品の「メロンクリームソーダ」は淡い色調で仕上がっていて、10代の感性でしか描けない繊細さを感じました。このような感受性をこれからもずっと大切にしていって欲しいと思いました。10代から80代の方々の絵画作品を観させて頂き、改めて絵画表現の幅広さと奥深さを教えて頂きました。ありがとうございました。

また、高校生くらいの若い世代の作品が多かったのも印象に残りました。

今回の出品作品も力作ばかりで、鑑賞すればする程それぞれの作品の良いところに引き込まれるような作品がとでも多かったのが印象的でした。大賞に選ばせて頂いた「街角のカフェ」はとでも温かいタッチで人物や車などのモチーフが描かれているのが印象的で、ずっと観ていたくなるような素敵な絵画作品です。構図も工夫されていて、カフェの扉やテントに描かれているモノリザにも絵画的な面白さを感じました。また、高校生くらいの若い世代の作品が多かったのも印象に残りました。特別賞に選ばせていただいた「まんぶく電車」からはブッダやキリストとオムライスなどの奇抜なモチーフ選びに若い世代の感性を感じました。入選作品の「メロンクリームソーダ」は淡い色調で仕上がっていて、10代の感性でしか描けない繊細さを感じました。このような感受性をこれからもずっと大切にしていって欲しいと思いました。10代から80代の方々の絵画作品を観させて頂き、改めて絵画表現の幅広さと奥深さを教えて頂きました。ありがとうございました。

今回の出品作品も力作ばかりで、鑑賞すればする程それぞれの作品の良いところに引き込まれるような作品がとでも多かったのが印象的でした。大賞に選ばせて頂いた「街角のカフェ」はとでも温かいタッチで人物や車などのモチーフが描かれているのが印象的で、ずっと観ていたくなるような素敵な絵画作品です。構図も工夫されていて、カフェの扉やテントに描かれているモノリザにも絵画的な面白さを感じました。また、高校生くらいの若い世代の作品が多かったのも印象に残りました。特別賞に選ばせていただいた「まんぶく電車」からはブッダやキリストとオムライスなどの奇抜なモチーフ選びに若い世代の感性を感じました。入選作品の「メロンクリームソーダ」は淡い色調で仕上がっていて、10代の感性でしか描けない繊細さを感じました。このような感受性をこれからもずっと大切にしていって欲しいと思いました。10代から80代の方々の絵画作品を観させて頂き、改めて絵画表現の幅広さと奥深さを教えて頂きました。ありがとうございました。

大賞・杉浦さん、特別賞・遠山さんの作品は、彫刻的云々よりも日常の中で木を刻む喜び楽しさがよりストレートに感じられ暖かさを内包する作品と思いました。奨励賞・馬淵さんは、流木を巧みに構成した佳い作品でしたが、氏独特の紙面を丸め集積した部分との構成に難があるように感じました。あと一点、奨励賞・山口さんの作品は、現代的要素（形態）を取り入れた構成で、とても興味を持ちましたが、面を成す木片の組み立てが、作品の印象を弱めて

いるように思いました。しかし、次作品への展開がとても楽しみな作者と期待します。この5年間僕にとっても改めて彫刻について考える佳い時間を頂きました。今まで応募して頂いた方々の、創造の喜び楽しさが、これからの人生の彩りをより豊にするものであれば幸いです。ありがとうございました。

今年度の書部門も、漢字・仮名・漢字仮名交じりの書・篆刻といった様々な分野に、半切から公募展サイズの大きなものまで、また、高校生から老練なベテランの方々までの幅広い出品がありました。熟達した技法を駆使したものや、心を込めて一心に丁寧に書いた作品など、日頃の鍛錬と努力が伝わってくる力作揃いであったことが記念すべき第70回を迎えた本展の書部門の特徴でした。浜松の芸術文化の向上に寄与し、市展を育ててこられた主催者の方々の熱意に敬意を表します。ところで、近年の多くの書展ではテクニックを駆使し、基礎基本の部分よりも視覚的に見栄えが良いものが好まれる傾向があります。しかし、本審査では初心に帰り、まず全作品を丁寧に一字一字チェックしていきました。すると、せっかく全体感と技術力が優れていると思われても脱字や誤字、そこまでいかなくても怪しい字形を含むものが作品中に存在することが判り、大変惜しく思いました。多字数の作品では前半の線質はしっかりしているも、後半まで一貫せずに緩慢になっているものや、文字の大小が不自然にデフォルメされているもの、墨色及び、落款の書き方に一考を有するものが多々見られました。河島さんの作品は構成及び造形力が抜群で、鍛錬された書技が個性豊かな光彩を放っているので大賞としました。毛利さんの作品は古典の書法を鍛え抜き到達した伝統美を象徴する作品といえましょう。大石さんの作品はテクニックを前面に駆使したモダンな仮名作品です。加藤さんの作品は六朝の楷書を鍛錬して高めた意気込みと新鮮さに心惹かれました。今年は漢字仮名交じりの書が不調でしたが、平川さんの「創造の湖」は雄大な浜名湖を眺めるような大らかさが魅力的でした。皆さんの今後のご精進に期待します。

今回の工芸部門は、一般的に言われている「工芸」の分野には入らない表現技法の作品が多く、「その他」の作品が全て工芸部門に出品されている感があり、その審査は困難を極めました。審査は、形の美しさや緊張感、素材を扱う技法の習得度とデザインの独自性に加え、作品へのこだわりを判断基準にしました。

奨励賞の村石修司さんの「銀河の光」は、轆轤技術の確かさと照明器具に展開した独創性を評価しました。同じく奨励賞の石井孝子さんの「ユリの乱舞（テーブルセンター）」は緻密なフランス刺繍の技術と穏やかな色遣いを評価しました。

勝田つかささんの「狼を被る・2023」と齋藤幸宏さんの「“Be Alive”」は、少し気になった作品でした。勝田さんの作品は、一般的に言う工芸のジャンルではありません。作者の強いこだわりが感じられて今回は入選としましたが、次回からは彫刻部門に応募すると良いと思います。齋藤さんの作品は陶芸作品に様々な素材を組み合わせた作品で、他にない魅力を感じました。構成部品を絞り込むと、より強い統一感が出ると思います。

工芸作品は多種多様に及びます。今回応募が無かった金属やガラスは、大掛かりな設備が必要で取扱いは大変ですが、その分、素材の魅力に溢れています。ぜひ次回は金属やガラスなどの作品にも挑戦して欲しいと思います。多くの方々が様々な素材のアートに興味を持ち、この地域が文化的に一層豊かになる事を期待しています。

また、高校生くらいの若い世代の作品が多かったのも印象に残りました。

今回の写真部門は、一般的に言われている「写真」の分野には入らない表現技法の作品が多く、「その他」の作品が全て写真部門に出品されている感があり、その審査は困難を極めました。審査は、形の美しさや緊張感、素材を扱う技法の習得度とデザインの独自性に加え、作品へのこだわりを判断基準にしました。奨励賞の若木信吾さんの「ひときぎ」は、繊細な光と影のコントラストを巧みに表現し、静寂な空間に独特の美しさを演出しています。同じく奨励賞の山本一樹さんの「静かなる雨」は、繊細な筆致と墨の濃淡を巧みに表現し、静寂な空間に独特の美しさを演出しています。勝田つかささんの「狼を被る・2023」と齋藤幸宏さんの「“Be Alive”」は、少し気になった作品でした。勝田さんの作品は、一般的に言う工芸のジャンルではありません。作者の強いこだわりが感じられて今回は入選としましたが、次回からは彫刻部門に応募すると良いと思います。齋藤さんの作品は陶芸作品に様々な素材を組み合わせた作品で、他にない魅力を感じました。構成部品を絞り込むと、より強い統一感が出ると思います。SNS で写真を見る機会が急増して、記憶に残る突出した写真を作るのは不可能とも思える時代に、プリント作品を作ろうとする意欲はそれだけでも応募者全員に賞をあげたい気持ちです。写真一点の存在感を強く出すプリント作りは「ものづくり」といっても良いでしょう。しかしそのためには細かく精度を上げていく必要があります。それは技術の面とともに、見る力をつけていくこともとても大事です。大賞に選ばせていただいた藤田正男さんのオシドリの写真は、これ以上ないというほどのストレート写真で、動物の持つフォルムや色彩の美しさを表現しています。ディレクションできない鳥たちに対して、この配置や背景とのバランスなどを掴むことができたのはまさに秀逸で、動物写真というジャンルを超えています。そして美しいプリント仕上げに説得力があります。そのストレートさは作者の意図を感じさせない、純粋な自然の美しさだけを見るものを感じさせます。若干惜しかったのは“ひととき”というタイトルの選びでしょうか。僕の中で大賞の僅差だった児玉将良さんの、新聞を読む人物スナップも同じタイトルだったのは偶然かもしれませんが、もう少しだけ具体的なつながりが欲しかったところです。

今年度の書部門も、漢字・仮名・漢字仮名交じりの書・篆刻といった様々な分野に、半切から公募展サイズの大きなものまで、また、高校生から老練なベテランの方々までの幅広い出品がありました。熟達した技法を駆使したものや、心を込めて一心に丁寧に書いた作品など、日頃の鍛錬と努力が伝わってくる力作揃いであったことが記念すべき第70回を迎えた本展の書部門の特徴でした。浜松の芸術文化の向上に寄与し、市展を育ててこられた主催者の方々の熱意に敬意を表します。ところで、近年の多くの書展ではテクニックを駆使し、基礎基本の部分よりも視覚的に見栄えが良いものが好まれる傾向があります。しかし、本審査では初心に帰り、まず全作品を丁寧に一字一字チェックしていきました。すると、せっかく全体感と技術力が優れていると思われても脱字や誤字、そこまでいかなくても怪しい字形を含むものが作品中に存在することが判り、大変惜しく思いました。多字数の作品では前半の線質はしっかりしているも、後半まで一貫せずに緩慢になっているものや、文字の大小が不自然にデフォルメされているもの、墨色及び、落款の書き方に一考を有するものが多々見られました。河島さんの作品は構成及び造形力が抜群で、鍛錬された書技が個性豊かな光彩を放っているので大賞としました。毛利さんの作品は古典の書法を鍛え抜き到達した伝統美を象徴する作品といえましょう。大石さんの作品はテクニックを前面に駆使したモダンな仮名作品です。加藤さんの作品は六朝の楷書を鍛錬して高めた意気込みと新鮮さに心惹かれました。今年は漢字仮名交じりの書が不調でしたが、平川さんの「創造の湖」は雄大な浜名湖を眺めるような大らかさが魅力的でした。皆さんの今後のご精進に期待します。

令和4年度 浜松市第70回市展

今年度の書部門も、漢字・仮名・漢字仮名交じりの書・篆刻といった様々な分野に、半切から公募展サイズの大きなものまで、また、高校生から老練なベテランの方々までの幅広い出品がありました。熟達した技法を駆使したものや、心を込めて一心に丁寧に書いた作品など、日頃の鍛錬と努力が伝わってくる力作揃いであったことが記念すべき第70回を迎えた本展の書部門の特徴でした。浜松の芸術文化の向上に寄与し、市展を育ててこられた主催者の方々の熱意に敬意を表します。ところで、近年の多くの書展ではテクニックを駆使し、基礎基本の部分よりも視覚的に見栄えが良いものが好まれる傾向があります。しかし、本審査では初心に帰り、まず全作品を丁寧に一字一字チェックしていきました。すると、せっかく全体感と技術力が優れていると思われても脱字や誤字、そこまでいかなくても怪しい字形を含むものが作品中に存在することが判り、大変惜しく思いました。多字数の作品では前半の線質はしっかりしているも、後半まで一貫せずに緩慢になっているものや、文字の大小が不自然にデフォルメされているもの、墨色及び、落款の書き方に一考を有するものが多々見られました。河島さんの作品は構成及び造形力が抜群で、鍛錬された書技が個性豊かな光彩を放っているので大賞としました。毛利さんの作品は古典の書法を鍛え抜き到達した伝統美を象徴する作品といえましょう。大石さんの作品はテクニックを前面に駆使したモダンな仮名作品です。加藤さんの作品は六朝の楷書を鍛錬して高めた意気込みと新鮮さに心惹かれました。今年は漢字仮名交じりの書が不調でしたが、平川さんの「創造の湖」は雄大な浜名湖を眺めるような大らかさが魅力的でした。皆さんの今後のご精進に期待します。

また、高校生くらいの若い世代の作品が多かったのも印象に残りました。

今回の工芸部門は、一般的に言われている「工芸」の分野には入らない表現技法の作品が多く、「その他」の作品が全て工芸部門に出品されている感があり、その審査は困難を極めました。

審査は、形の美しさや緊張感、素材を扱う技法の習得度とデザインの独自性に加え、作品へのこだわりを判断基準にしました。奨励賞の村石修司さんの「銀河の光」は、轆轤技術の確かさと照明器具に展開した独創性を評価しました。同じく奨励賞の石井孝子さんの「ユリの乱舞（テーブルセンター）」は緻密なフランス刺繍の技術と穏やかな色遣いを評価しました。

勝田つかささんの「狼を被る・2023」と齋藤幸宏さんの「“Be Alive”」は、少し気になった作品でした。勝田さんの作品は、一般的に言う工芸のジャンルではありません。作者の強いこだわりが感じられて今回は入選としましたが、次回からは彫刻部門に応募すると良いと思います。齋藤さんの作品は陶芸作品に様々な素材を組み合わせた作品で、他にない魅力を感じました。構成部品を絞り込むと、より強い統一感が出ると思います。

工芸作品は多種多様に及びます。今回応募が無かった金属やガラスは、大掛かりな設備が必要で取扱いは大変ですが、その分、素材の魅力に溢れています。ぜひ次回は金属やガラスなどの作品にも挑戦して欲しいと思います。多くの方々が様々な素材のアートに興味を持ち、この地域が文化的に一層豊かになる事を期待しています。

また、高校生くらいの若い世代の作品が多かったのも印象に残りました。

今回の写真部門は、一般的に言われている「写真」の分野には入らない表現技法の作品が多く、「その他」の作品が全て写真部門に出品されている感があり、その審査は困難を極めました。

今回の写真部門は、一般的に言われている「写真」の分野には入らない表現技法の作品が多く、「その他」の作品が全て写真部門に出品されている感があり、その審査は困難を極めました。審査は、形の美しさや緊張感、素材を扱う技法の習得度とデザインの独自性に加え、作品へのこだわりを判断基準にしました。奨励賞の若木信吾さんの「ひときぎ」は、繊細な光と影のコントラストを巧みに表現し、静寂な空間に独特の美しさを演出しています。同じく奨励賞の山本一樹さんの「静かなる雨」は、繊細な筆致と墨の濃淡を巧みに表現し、静寂な空間に独特の美しさを演出しています。勝田つかささんの「狼を被る・2023」と齋藤幸宏さんの「“Be Alive”」は、少し気になった作品でした。勝田さんの作品は、一般的に言う工芸のジャンルではありません。作者の強いこだわりが感じられて今回は入選としましたが、次回からは彫刻部門に応募すると良いと思います。齋藤さんの作品は陶芸作品に様々な素材を組み合わせた作品で、他にない魅力を感じました。構成部品を絞り込むと、より強い統一感が出ると思います。SNS で写真を見る機会が急増して、記憶に残る突出した写真を作るのは不可能とも思える時代に、プリント作品を作ろうとする意欲はそれだけでも応募者全員に賞をあげたい気持ちです。写真一点の存在感を強く出すプリント作りは「ものづくり」といっても良いでしょう。しかしそのためには細かく精度を上げていく必要があります。それは技術の面とともに、見る力をつけていくこともとても大事です。大賞に選ばせていただいた藤田正男さんのオシドリの写真は、これ以上ないというほどのストレート写真で、動物の持つフォルムや色彩の美しさを表現しています。ディレクションできない鳥たちに対して、この配置や背景とのバランスなどを掴むことができたのはまさに秀逸で、動物写真というジャンルを超えています。そして美しいプリント仕上げに説得力があります。そのストレートさは作者の意図を感じさせない、純粋な自然の美しさだけを見るものを感じさせます。若干惜しかったのは“ひととき”というタイトルの選びでしょうか。僕の中で大賞の僅差だった児玉将良さんの、新聞を読む人物スナップも同じタイトルだったのは偶然かもしれませんが、もう少しだけ具体的つながりが欲しかったところです。

主催：浜松市

